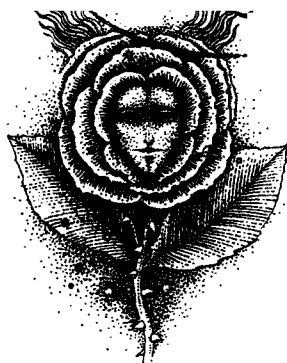


反悲劇・靈魂

倉橋由美子全

倉橋由美子全作品

7



新潮社版

くらはしゆみこ
倉橋由美子全作品7

一九七六年四月一五日印刷

一九七六年四月二〇日発行

著者倉橋由美子

発行者佐藤亮一

発行所株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七

電話 業務部(〇三)三六六―五一一

編集部(〇三)三六六―五四一一

振替東京四一八〇八

二光印刷 新宿加藤製本

定価九五〇円



© Yumiko Kurahashi
Printed in Japan 1976
〈第七回配本〉

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

倉橋由美子全作品 7 目次

反悲劇 5

ある遊戯 197

靈魂 215

作品ノート 7 241

倉橋由美子全作品 7

反
悲
劇

△反悲劇・目次▽

向日葵の家 7

醉郷にて 46

白い髪の童女 93

河口に死す 119

神神がいたところの話

向日葵の家

父の名とその死後の所在がわかったという。そのことと、ぼくが感化院から出されたこととは関係があったかどうか、よくはわからない。とにかくここを出たらすぐお父さんのお墓に詣でるようにと院長はいつて、わずかばかりの所持品と数通の書類、それにかんりの額の現金をわたしてくれたので、ぼくは夜から朝にかけて汽車の旅をして、この河口の町にやってきた。父の墓はここから近い海辺の墓地にあるはずだ。

駅前広場からバスに乗った。岬行きのバスで、墓地へ行くには終点の岬とそのひとつ手前の岬との間で降りればよいと車掌が教えてくれた。河口にかかった長い橋をわたると、町並はすぐつきて、バスは弓なりにどこまでも右に曲っているような路を走った。それはきつと海が決めた境界線にしたがってそうになっていたのだらう。窓から吹きこ

む空気もすでに海の息で、そのしめりけと匂いがぼくの顔にさわやかだった。

バスを降りると、ぼくはすぐに海へ通じる細いみちをみつめた。枇杷や蜜柑の樹、椿、石垣やうこぎの生垣、人の声もきこえない農家の、石をおいた屋根、やかましく騒ぐ鴉、頭を垂れて思念しながら行きがちだった黒犬、そしてみちはやがて砂道となって両側がひらけた。小さな川、その土手をはう浜屋顔、まばらに立っている松、そのむこうに海の断片がみえはじめた。ぼくははだしになって小川をわたり、土手にのぼった。そこから墓地がひろがっていた。海の額縁に入れられて、動かない羊の群れのように。

海と平行する土手のうえを行くと蟬の聲がやかましい。この土手と松林が墓地の自然の境界をなしている。白い炎をあけて燃えている石の静寂のうえに視線を放ちながら、ぼくはゆっくりと歩いていった。数えきれない石の群れ、大小さまざま、色もさまざま、そしてよくみれば少しずつ思い思いにかしいで生えている墓石、それらは時をせきとめるためのおびただしい杭のようだ。この無秩序な石の群生のなかからぼくはどうやって父の墓を探しだすことができるだらう？　だが墓地のはずれにぼくは鉄柵に囲まれた一角をみつけた。なかに犬枇杷の木が一本、ぼくの知らない

い亜熱帯樹が数本、ここは明らかに特別に由緒も財産もある家柄の一族の墓地にちがいない。入口は海に面して、竝琴を模した鉄の門の、錠は錆びついたままはずれている。手をかけるとこの鉄のハープはかすかにきしんで開いた。ぼくは墓所にはいった。そして石のうえに父の家の姓を読み、父の名が刻まれた墓石をみいだした。用意してきた花を供え、しゃがんで合掌したとき、額を流れおちる一筋の汗にはじめて気づいた。

しばらくのあいだ、大枇杷の木の下に腰をおろして考えごとをした。ものを思うこと、頭をひらいて意識のガスをさまざまなものにむかって拡散させることがぼくは大好きだ。ものとはこの墓地から海への眺望のなかに含まれるあらゆるもの、動くものと不動のもの、無機的なものと植物的なもの、光と風、この墓地に堆積している死、むしろ長い倦怠、それらのものをめぐってぼく自身にかえってくる思念の巡回。しかしぼくはいまは自分のことを考えたくないのです、それはたちまちぼくのまえのさまざまもののへと投げかえされた。その巡回は夢と現実のあいだで寄せてはかえす波に似ていた。あるいは海そのものがひとつの思念のようだった。

人のけはいがした。ぼくは墓地から出ると、少しはなれて、父の家の墓所と関係した人間であるともないともいえるような曖昧な距離をとって、砂の斜面に坐った。やってきたのは土地の数人の女、みんな紺の仕事着を着て、同じ色の頭布をかぶっているの、その陽に灼けた顔の細部はほとんどみることができなかった。たぶんぼくの倍以上の年の女たちだと思う。なかには明らかに老婆もいた。手桶を頭にのせて支えている女も二人。女たちはぼくが出てきたばかりの墓所にはいった。そしてはびこった雑草を刈り、掃除をはじめた。ぼくはいまが盂蘭盆のまえであることを思いだした。

「ちようどいまごろではなかったですか」と腰を曲げたまま一人がいった。「たしかお盆のまえのことでしたから」
「きのうか今日かというところですよ」

「仏さまが岬に流れついたのがけさでしたよ。よく憶えています」と一人が断言した。

「あら、このお花はだれがあげたのでしょうか」

ぼくはハマアザミのあいだに見え隠れする女たちのほうをうかがいながらじっとしていた。父の墓のまわりに集ってくちぐちにいいあっているなかに、いくつかな名前が出

てくるが、ぼくの知らないものばかりだ。そのうちに輪がゆるんでまた掃除がつづけられ、やがてそれが終ると、女たちは大枇杷の木の下で弁当をひらいた。ほとんど正確に正午だった。

突然、口のなかのものをあわててのみこんだ声が、ぼくの名前を叫んだ。それがざわめきをひきおこし、否定をあらかず声が高まった。

「坊ちゃんが生きていて、帰っていらっしやったなんて」「まだ乳ばなれもしないうちに盗みだされて、それっきり行方も知れなかったし」

「村では、もうとつくにこの世にはいらっしやらないだろうといわれていたのに」

「また墓がひとつふえるわけですか」

「坊ちゃんが病院から盗まれたというのも嘘で、ほんとうは里子に出されたという噂もありますよ」

「それも捨て子も同然に。女の子はいずれ嫁に出して追い払うとしても、男の子はそうはいかないから、赤ん坊のうちどこかへやってしまったのでしょうか」

「するとそれもいまの旦那さまのさしがねですか？」

「ほんととは奥さまのほうかもしれませんよ」

「まさか、いくらなんでもそこまでは」

「それくらいのことにはなさるかたですよ」

「なにしろあの当時は閨の伽のおかたに夢中でいらっしやったから」

「あのころは若くていい男でしたもの」

女たちはそこで声をのみこんで卑猥に笑った。それから女たちは一段と輪をちぢめて顔を寄せ、漏斗のなかに吸いこまれて、ときどき噴きだす笑い声は、ひとつの獲物を水いらずでつづいてゐる鳥どもの声のようだった。ぼくはいままでこの種の動物的親密さというものを知らなかった。

だがこの水いらずの状態もやがて弛んで、白けた沈黙のあと、女たちはまた唐突に、まじめな声でぼくの名前を口にした。

「もし坊ちゃんが御存命だったら」と一人がことさら憂慮の重みをつけた声でいった。

「なんとかして連絡をとったほうが……そうしてあのことこっそりとお耳にいれたほうが」

「あのことをお教えするのですか」

「御自分のお父さまがお母さまといまの旦那さまの手で殺されたということを」

「そんなおそろしい噂をお耳にいれるのですか」

「でもこの土地でその噂を信じてない人間はだれもいない

のでしょう」

「警察のほかは」

「警察だって知らないわけはないですよ。でもなんの証拠もないことでしたし」

「それより、坊ちゃんにその話をお知らせするのはどんなものでしょうか、いまの旦那さまや奥さまにあたしたちのしたことが知れたら……」

「でも、それではあの人殺しのお二人は結局なんのおとがめも受けずに我が世の春を謳うことになるではありませんか」

「それもしかたがないでしょう」

「なにしろあたしたちはあのかたがたの御恩顧を受けなければやっていけませんものね」

「かりにも裏切るような真似はできませんよ」

「でも、お嬢さんにだけはお知らせしてあげたら」

「なにをですか」

「このお花のことですよ。ひょっとすると坊ちゃんが……」

「そんなこと、あるはずがないでしょう」

ぼくは少しのあいだうたたねをしたようだ。気がつくとも墓地に女たちの姿はなくて、残されたのは白い石と真昼の空虚だけだった。あの一群の黒っぽい鳥に似た女たちはど

こへ飛びたってしまったのだろうか？ 松林やそのうしろの野原のうえをしきりに飛びまわっているのは十数羽の鴉らしい。ときに海と陸の境を犯すが、けっして海上遠くへは出ず、あるものはみずからと交叉する閉曲線を、あるものは二度ともとの位置を通らない曲線を、みえない線で描いている。岬のうえにそそり立っている積乱雲の城。それが刻々と輪郭を変えていくのをみていると、眼が痛くなる。ぼくの希望は精神を一羽の鳥に変えて飛び、あの雲の城郭のなかに棲むことだった。急に感化院のことがぼくの頭にかえってきた。地の皺のような谷をのぼりつめた高原の奥の感化院はあの積乱雲の城よりも遠いところにあって、なぜか二度とそこへは帰っていけないような気がした。院長は別れるとき、墓参りをすませたらもどってくるようにとはいわなかった。もどってきてはいけないともいわなかった。以前、院長は、ぼくをゆくゆくは感化院の人間にするという意向をもらしていたという。そしてぼくもそれを望んでいて、院長には、はっきりといったわけではないが、院長もぼくの気持を理解していたと思う。しかし今度の出発はあまりにもあわただしく、ぼくは院長と将来のことを充分相談するひまもなかったのだ。院長の態度もいつもとはちがうようだった。感化院の人間のだれもがもっている

木彫の高僧を思わせる風貌とはちがったものを、そのときの院長にみたように思う。その印象からも、ぼくは自分が永久に追放されるのではないかという不安を抱き、それはこの強い太陽のもとでも氷解しないでぼくの頭の芯を痛めていた。ぼくはあの感化院の人間であることを望んでいるし、おまえは何者かときかれたときの答になりうるのは、ぼくが感化院の人間であるということしかない。ぼくに信じられることはほかにはない。ぼくがだれであるかがわかり、名前を得て、父や母やその他の家族とのつながりが発見されたところで、それはぼくにとっては、自分が将棋の駒のひとつとして、かりに盤上のある位置におかれたというだけでしかない。ここには信じるにたるものはなにもない。さつきおぼろげながらききとった物語も、ぼくに関係のあることは思えないのだ。ぼくは立ちあがった。そしてどこへ行くかも決めずに歩きだした。

夏のさかりだったが、この荒れた海辺に人影は少かった。ぼくは岬と岬のあいだの弓の形に彎曲した渚を歩いていった。そのとき遠い叫び声がぼくを呼んでいるように思われて、振りかえると、墓地からつづいてきたぼくの足跡と平

行するもう一本の破線を砂にしるしながら、一人の少女が走ってきた。ぼくはその破線が次第に延びて近づいてくるのをみつめていた。それはついにぼくから二、三步をへだてて止った。そして長くて短い時間のあいだ、海のざわめきと微風の均質な圧力のなかで、ぼくたちはむかいあって立っていた。時刻は正午すぎで、眼をおとすと、ぼくの影はちぢまって矮小な矢印になり、少女の足を指している。その一瞬、ぼくは一本の杭のように砂のなかに打ちこまれて影も残さずに消えてしまうことを願った。なぜかわからないが、不吉な運命の宣告をきくためにそこに立たされているような気がしたから。風にほぐされた髪で首を巻かれて立っている少女は、蛮人が彫った悪霊よけの、あるいはそれ自体が悪霊の、魔力をあらわす奇怪な柱に似ていた。そのとき少女の眼がひとつだけあらわれ、髪は吹きはらわれて、暗い口が裂けて歯が光った。

「どこへいらっしゃるの？」と少女がいった。ぼくは行手に横たわる岬のほうを曖昧に指さしたが、ほんとうはその先にながら自分がなにをめざしているかもわかっていなかった。墓参りをすませると、ぼくにはそれがすべての終りのように思われたのだ。

「お父さまのお墓参りに来てくださったのね」と少女はい

った。

「お父さま？」

「あなたのお父さまで、あたしのお父さま」

そういうと少女はぼくの全身をみるために一歩さがって距離をとった。ぼくも思わず一歩さがって、次の瞬間に起るかもしれない小さな跳躍や抱擁——なぜぼくはこんなことを考えたのだろう——を避けようと身がまえた。だがそんなことは起らなかった。そのとき少女は口をひきしめると、不安定に腰をかがめた姿勢でぼくの残した足跡に片足をいれた。そしてそれが自分の足に合うかどうかを注意ぶかく調べた。

「やっぱりびったりだわ。あなたはわたしの弟なのね。わたしたちいっしょに生れた双子のきょうだいなのよ。あたしが姉のLで、あなたが弟のK。その逆でもいいけど、そう決めておくわ」

「それは困りますよ」とぼくは思わず異議をとなえた。まるで、金色の美しくて恐しい蜘蛛が張りめぐらした巣にかかった虫のような気持だった。ぼくはそんな関係の糸に巻きこまれまいとして頭を働かせた。そして、「第一ぼくはそんな名前のものではありません」といった。

「それならなぜお父さまのお墓にお花を供えていらっしや

ったの？」

「ぼくはあなたの弟さんの親友でした。それで、弟さんの代理でやってきたのです。もっともこれは弟さんから正式に頼まれたわけではありませんが、……じつをいうと、弟さんはもうぼくに頼むことも自分でここにやってくることもできない状態にあるのです……Kは死にました」

「嘘だわ、そんなこと」

少女は舌がしびれたかのような鈍い口調でそうつぶやくとぼくの手を握った。冷たくて、少し汗をかいだ掌だった。「お気の毒ですが、弟さんは三日まえに事故で急死なされたのです。運動場で練習中に円盤が頭にあたって。まったく信じられないような事故でした。頭の骨が割れて脳が出ていました。その後数時間、心臓だけは動いていました。どうにも助からなかったのです」

「あなたはお話がお上手ね。それにそのまじめなお顔をみていると、信じなければいけないような気持になるわ」そういういながら少女はぼくの手を握りしめたまま急に重たくなって、砂のうえに坐ってしまった。ぼくもそれにならうと、少女は首を振って、「でもKは死ぬはずがないわ」といい、ぼくの肩に頭をもたせかけた。ぼくは用心した。なにごとにも用心しすぎるのがぼくの強みであり弱みでもある

が、感化院の外の人間に対してはそうせざるをえないのだ。ぼくには、自分の名前をあかしてこの狂っているかもしれない少女の弟になるつもりはなかった。かりに少女が狂って、また先刻の土地の女たちの話が事実だったとしても、そこで求められている人物がぼくであることがどうしてわかるのか。ぼくがKという名をもっていて、いままでのところ話のなかの問題の人物に該当することを認めたとしても、そのようなKに、だれかがぼくを仕立てあげたということもありうるではないか？

少女はぼくにもたれかかったまま、「足合せをしない？」といい、その右脚をぼくの左脚にくっつけた。砂のうえにぼくの左足と、少女の右足とが並んだ。

「ほら、ごらんなさい。完全な相似形だわ」

「人間の足は他人同士でもびっくりするほど似ていることが多いんですよ」

「あなたは用心ぶかいかね。なにをこわがっていらっしやるの？」

そして少女の足がぼくの足の甲にはいあがって、そのやわらかい土踏まずのくぼみでしっかりとぼくの足をとらえ、指の長い手がのびてきてぼくの脛を撫でた。ぼくはくすぐったがるふりをして逃げようとしたが、少女はぼくの耳に

口を寄せて、熱い息を吹きこんだ。

「こわがらないで。あなたはあたしがさわっていいはずのひとよ、K。二十年まえにはこの世ではないところで抱きあっていた仲なんですよ」

「その人なら死んでしまったといったのに」

「もしそうだとしてもあなたはそのかわりのかた、Kと同じ資格のかただから、あたしにとってはKなんだわ」

そういいながらLは足と手による執拗な愛撫をやめなかつた。まるで、その全身をめぐっている毒をぼくに伝えようとしているかのように。

「でもぼくはKではないんですから、やっぱりそんなふうにはさわらないでください。それに、とってもくすぐったいです。じつをいうとぼくはひとにからだをさわられるのがあまり好きじゃない。さわったりしなくても、はなれていてことばを使うこともできますからね」

「それではきくけど」Lはさわるのをやめ、気をわるくしたふうもなくいった。「お父さまのお墓のことはどうしてわかったの？」

「だれかが院長に知らせきたらしい、Kのお父さんのことやその墓のある場所を。それではじめてKのほんとうの名前がKであることもわかったのです。でもそれはKが死

んでからのことでした」

「きつとあの弁護士が知らせたんだわ」とLはいった。そして三角形のよく光る舌の先を出して唇をなめたが、そのしぐさは魚をたっぶり食べたあとの猫にそっくりで、やはり猫のそれに似た大きな眼を輝かせてLはいった。「お父さまの古い知合いであたしの後見人。そして正義の守護神ですって。ときどき電話をかけてくるの。お父さまがどんなふうにして殺されたかを教えてくれたのも、Kの居場所をみつけたしてあたしに知らせてくれたのも、その弁護士なのよ」

「するとKのお父さんは殺されたんですか？ そんな話はいきいていませんでしたか」

「殺されたの。姦夫姦婦に。そしてあとのほうの姦婦というのがKとあたしの母のことよ」

「その、カンブカンブってなんのことです？」ぼくは思わず笑いだしながらきいてみた。「どんな字を書くんですか？」

「そんなことを知らないの？」とLは軽蔑したようにいい、得意げに顎をつきだした。「あとで辞書を引いてみるといいわ。もっともこんな大時代なことばはあたしの辞書にはないわ。あたしは冗談のつもりでわざと使ったのよ」

「それでぼくも笑ってみたんですがね」

「ちがうのよ。あなたにはちっともわかってないわ」とLは鼻を鳴らしていった。「これは笑うべきことじゃないわ」たしかに、これはひとが死んだ話だから、笑ったりするのは不謹慎なことにちがいはなかった。とはいっても、ひとが死に、それも姦夫姦婦に殺害されたという酸鼻をきわめた事件があっただけで、悲劇といえるのだろうか。卑小で滑稽な悲惨というものだってあるのだから、とぼくはLについてもう一度墓地のほうへ歩きながら考えた。いま起りつつあるのはなんだろう？ ふいにぼくは白昼の雷にうたれて気が遠くなった。「どうしたの？ 気分でもわるいの？」とLが立ちどまっていった。

「軽い日射病かもしれない。それにおなかもすいているんです」とぼくはうわのそらで答えた。いま押しよせてきたある考えが砂のようにぼくを埋めてしまったのだ。足をとられてすすむこともできない。頭の容器のなかで反響している発見の叫び声がぼくを惑乱させる。これはあの話だ。すでにつくられた、どこかにある話だ。ぼくはその筋書のなかにはまりこもうとしているのだ。

ぼくには関係ない、とぼくはつぶやいた。関係ない。だがこんな筋書のなかにぼくをはめこんだのか。Lやその